



楽焼赤茶碗『加賀光悦』本阿弥光悦作(相国寺蔵)

## 第7号：平成26年11月1日 本阿弥光悦 —— 1

本阿弥家は刀剣の鑑定、磨礪、淨拭(めきき・とぎ・ぬぐい)を家職としていた。つまり、殺人の道具である刀剣が商いもとになっています。鑑定は使いものになる刀剣であるのかどうかを決め、磨礪とは切れるようにすること、淨拭は刀剣のくもりをなくし美しく見せるだけではなく、拵えにも係わります。戦国武将たちの間に広がっていた武具に対する美意識が実用品である刀剣に特別な想いを込める風潮を育て上げ、特異な業種を生み出したのであろう、と考えます。その風潮を商いの種にしてきたのが本阿弥家ですから、光悦に独自の美への想いが芽生えても自然なのではないかと思えます。彼は様々な作品を遺しています。彼は武士と職人との仲介者であり、支配階級に成り上がった武士たちの御機嫌を取り、彼らの趣味にまで迎合せねばならない立場に甘んじることができなかつたのかも知れません。世俗を離れ、鷹峯に居を構えた環境は光悦自身の意識を展開させ変えさせたのではないだろうか。「太虚庵」と名乗らせ自然と遊ぶ心境にたちいったのであろう。